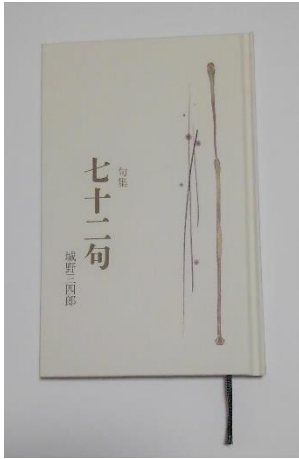


句集『七十二句』の紹介

2021年1月 HP 担当足立秀一記

城野宣臣氏が、この度、句集『七十二句』を上梓されました。



城野氏は、在職中より俳句を始められ、辻桃子主宰の俳句結社「童子」に入会されて、本格的に俳句作りを楽しんでおられます。

入会后、早々に「新童賞」を受賞される等、その才をフルに発揮され、入会6年で「童子」の同人となられて居ます。

定年後も引き続きその結社で俳句作りを楽しみながらその傍ら家庭菜園なども始められています。

丸谷才一氏が70歳で上梓された句集『七十句』を読んでこれもしゃれているなどと思い、句集をまとめる気になり、15年以上の句歴の中より70歳は過ぎて今年3月で72歳となる自分に合わせ、七十二句を選びすぎり、今回の句集『七十二句』をまとめ

上梓されました。

上梓を終えられた心境として「あらためて俳句をやっていてよかったと痛感した。」と述べられています。

俳号の「三四郎」は、ご自身もよく覚えておられない様ですが、学生時代に詩や短文を同人誌に出していた時に使ったペンネームで、漱石の小説に由来すると聞いています。

*句集『七十二句』の中より季節ごとに一句紹介させていただきます。

- ・春の句) 残雪やがれき燃やしてみな無言
- ・夏の句) 蜘蛛の囿に山雨至れり奥吉野
- ・秋の句) 空海の山と暮らして柿すだれ
- ・冬の句) 警備兵ひとかたまりに北京凍つ